

# 福祉・共生の基礎概念「幸福」をめぐって—徳としての幸福

近藤良樹

## 1. 幸福と徳は対立的だが・・・

道徳的な規範としての「当為」「徳」は、「～しなくてはならない」「～すべきである」と人を強制し、それに妨害的な感性・欲望を抑圧する。したがって、義務的な徳と、諸欲求を満足させるところに成立する自身の幸福は、しばしば対立する。周知のようにカントも、この対立を道德世界の根本対立とみなして、実践理性のアンチノミーにあげた。欲求の充足をなによりとする幸福主義は、反欲望の強制的義務的な徳の主張と一見すると明白に対立的である。

しかし、「みんなに、幸福を!」と説き、自他の幸福を追求する多くの幸福論者は、実は、当為や義務である幸福を主張したとも解されるのである。B. ラッセルは、その幸福論を『幸福の獲得』と題したが、それは、幸福は単に与えられる受身のものではなく、自身が積極的になり獲得しなくてはならないものだという主張に合わせてのことであった。豊かな富みのなかにあつて、ひとびとが「不幸」であるのを見て、それは、おかしい、幸福の客観的な条件は満たされているのであり、それに見合うように主観的に幸福となれ、幸福は意識して獲得すべきであるといったのである。「私の目的は、ふつうの日常的な不幸の治療(cure)を提示することだ」といい、「そのような不幸は、ほとんど、誤った世界観、誤った倫理、誤った生活習慣にある」(註1)もので、これを改める方法をしっかりと考え、心構えを変えるなら幸福になることができると論じたのである。

「ささやかな幸福」をいう亀井勝一郎にしてもそうであつたろう。かれは、だれでもが幸福になれるのだ、心がけ一つで、どんなひとでも、ささやかな幸福は得ることができるのだ、みんな幸福でなくてはならないと説いたのである。ささやかな喜びを感じたら、「それをその一日の幸福と思はなければなりません」(註2)、どんな苦しく貧しい生活のなかにも、幸福はたえず到来している、「すぐ傍まで来てあるのだ」(註3)、それなのに人は、欲ばってこれを取り逃がしているのだと。不平不満の贅沢なわがままな心を戒めるなら、幸福はもうあたえられているではないか、幸福の青い鳥は、手にしているではないか、もっともっとという貪欲なところをいれかえて、すなおに、与えられている恵みを噛みしめ、あるいは努力すればただちに得られる恵みに思っていたべきであると説いたのである。幸福論を説く多くの論者の思いは、恵みをそれとして自覚・反省するならば、もう現に幸せではないかと、ところをあらためるための方法を説いて、貪欲・不平不満をいましめ、「幸福にならなくてはならない」「幸福であるべきだ」といつているのである。当為としての、徳としての幸福は、幸福論ではふつうの主張になるといってよいであろう。

しかし、悪徳としての幸福があるのも確かなことである。自分の幸福を追求するとき、他者を排除してのみ得られる利己的な欲望充足がある。ひとをふみにじり傷つけることをもって、排他的になることをもって得られる幸福があり、詐欺などの犯罪的行為で得た富みから構成される幸

福がある。悪行を手段とし、悪徳をもって実現される幸福である。さらには、その幸福そのものが不純でよごれた悪徳とみなされるべき場合もある。麻薬中毒・アルコール依存症の者の主観的な快樂・幸福は、この快自体が悪であろう。不倫の恋の幸せは、その多くが背徳的である。過食・グルメの幸福は、悪癖で、徳とは対立するし、肉をはぎとられた魚の断末魔のすがたを見ながら、口に入れた魚の一切れに新鮮さを味わい満たされたものを感じるというような度はずれな悪習は、おそらくは悪徳である。幸福論者のすすめる幸福は、こういう悪徳ではないとすれば、どちらかといえば、徳か、徳に近い幸福をすすめるものだといってよいのであろう。

## 2. 徳としての幸福

愛は、慈悲・隣人愛としては、徳目にあげられる。しかし、愛は、奪うものとして、ときには、愛欲といわれ、渴愛といわれ、悪徳を代表するようなものになる。欲望・本能としての愛は、悪に傾くことがあるが、惜しみなく与える慈愛のようなものは、徳としての愛であり、善そのものとなる。幸福も、似たところがある。「徳としての」という限定がされることで、その人の求める幸福は、高貴なものに豊かなものにと方向づけられるのである。

「愛すべきである」といわれる徳となる愛は、感情的には不愉快なものへの嫌々ながらの愛であり、意志による強制をもったものである。徳としての隣人愛は、隣りの美しい人妻に恋することをいうのではない。憎々しい隣人への嫌々ながらの愛、敵対するものへの愛である。徳としての幸福もまたそういうところがある。意識して求めなくてはならない幸福は、本能的に自然に、放っておいて求められ生じるようなものではない。それは、まずは、感性的衝動のいやがるのを強制して求められる、より精神的で高級で高貴な幸福ということになるのであろう。

アリストテレスは、幸福を「徳(アレテー)に即しての活動」だという(註4)。ストア派は、理性的に生きるところに幸福をもとめ、アパテイア(=感情・欲望の破棄)をもって理性的徳行に生きることこそ真実幸福にあたいするのだと考えた。幸福が徳だというのではなく、徳が幸福にあたいすると考えたのである。精神的理性的な純粋な生き方のもとの幸福である。だが、これでは、幸福は、厳しいものに限定されてしまいそうである。

「ささやかな幸福」をいう亀井勝一郎は、「私は幸福について考へるたびに、ミレーのこの絵を思ひ出すことにしてゐる」とミレーの「晩鐘」の絵に幸福の典型を見い出している(註5)。一日の労働のあとのひとときのさわやかな安らぎとしての幸福である。積極的な快樂としての幸福ではないが、ストア派のような禁欲的幸福にくらべると、幸福を求める一般の者が受け入れやすい、より広い幸福であろう。

安らぎは、なによりも、苦しみからの解放に、不安からの解放に生じる。それは、苦悩の無、無の幸福である。無苦の幸福は、エピクロスが求めた幸福である。ショーペンハウアーのいう幸福もこれであった。彼等は、苦痛・苦悩からの解放としての無の安らぎこそが幸福だと考えた。それは、欲望を停止することで一層確実に得られる幸福であろう。欲望を無化するならば、欲望あつての不満・不快は、そしてそれに由来する不安は、生じようがなく、安らかである。この無の安らぎの幸福は、反欲望という点で徳そのものと一致する。

だが、ひとの普通の幸福は、そういう無の安らぎの幸福にはとどまらない。積極的な快樂をも肯定した幸福こそが一般的な幸福であろう。そこにもまた、徳となる幸福はあるといってよいように思われる。その快としての幸福が他人にとって不快でなく、迷惑をかけるようなものでなく、むしろ、その快を素直に享受して表現することが周囲にこころよいものであるならば、ここでは、無理をしてでも、その幸福を感じ、かつこれを表現すべきものとなるであろう。感じるべきであり、表現すべきものとして、当為となり、徳となる資格をもつといえるのではないか。

近所から「無農薬のいちごです」ということでいただいたものを食べる時、ことさらに感じるものもなく無反省に平然と食べるのではなく、無理をしてでも、それをしっかりと味わいながら、ありがたいことと反省し、かつ、これを笑顔でもって、表現していくのである。そのことにおいては、自身の味わいは、減少するのではなく、むしろ増大するであろうし、その恵みの反省において、与えられている生のこころよさを感じることができ、かつそのことの表現は、周囲にも快さを与えることであろう。それは、感性的な快樂に基づく幸福だろうが、意識的に自己を強制しなくては、生じにくいものであり、自己強制としての徳に類した幸福ということになる。

多くの幸福論は、精神主義的なストア派的な厳しい反感性・反欲望を説くのではない。ふつうの物質的な恵み、感性的な快をそれとして肯定して、それがちゃんと与えられているのに鈍感になっていることをいましめ、この物質的感性的な幸福をしっかりと意識にもたらしすべきことを説くものである。食欲で不遜な態度に陥っていることを自覚させて、すでに与えられている富みを幸いなものとして素直な眼でもって反省しなおす方法を説くものがふつうである。ひとは、価値あるものについて、これを獲得した当座は、その恵みに喜び・幸福感をいだくが、それに慣れてしまうと、一層のさち・めぐみをもとめていくのでなくては、満たされなくなる。それは、向上することを求める存在には、必要な心のあり方であるが、幸福感をもつということからは、妨害的なものになる。この与えられている恵みを繰り返して享受し直し、反省するならば、多くのひとは、不平不満の生活を、幸福感に満たされたものに切り替えられるという訳である。向上的な欲望からいうと、それを抑圧することとして、自己強制になり、意識して反省するという強制になるから、それは、強いてなすべき当為の形式をもつのであり、これを身につけ習慣化していくなれば、その充足感は、徳としての幸福になるということができよう。

### 3. 幸不幸の周囲への影響力

幸不幸をめぐる論議というと、まずは、それを感じる当人の個人的な問題として捉えられる。しかし、幸不幸というひとの人生の目的となるほどのものが社会に影響しないはずがなく、とくに身近な周囲のものには、そのあり方は、大きな影響を与える。喜びの感情がまわりのものを喜びにまきこみ、怒りの感情にとらえられている者のまわりには、ひとがあまり近づかないように、幸不幸の感情も周囲に影響する。家庭においてひとは、怒りっぽい者であるよりは、楽しく喜びにあふれている者であることが求められる。怒りが充満しているような家庭は、ぎすぎすし不和となり、やすらぎの場所であることをやめていく。意識して穏やかに楽しくふるまっている者は、周囲の他のものに同様のものを伝染させて、家庭は、穏やかさを増幅することにな

る。不幸顔をしていると、周囲もそれにつられ、それに合わせて暗くなる。暗い不幸顔をしている近親者の前で、「自分は、幸福だ」とはしゃぐわけにはいかないであろう。暗い顔のまえでは、暗い顔にあわせていくことになりがちである。逆に、幸福な顔をしているもののまえでは、あかるくなれる。とくに、幸不幸は、直接的反応である喜怒哀楽の感情とちがって、反省的で、自らの生全般が恵まれているとかいないとか捉えるもので、その場その場の反応ではなく、長く持続するものなので、その影響は、持続的なものとなる。

幸福と思っているひとは、自分を恵まれていると解釈して、ありがたいことだと満足しているのである。したがって、まわりのひとは、その幸福を与えてくれる一員として、有意義な役割をしていることが、支えがいが、気持ち良く感じられることになる。また、かれは、満たされているのだから、ひとに対して危険な存在ではありえず、近よって行って安心であり、満たされあまるものとの自己の解釈なのであれば、贈与的になりうる状況にあって、恵みのおすそ分けをしようとするかもしれない。さらに、なにより、幸福なひとのその笑顔は、周囲にあたたさかをもたらし、幸福感を伝染させていくことができるであろう。しかも、喜びや楽しさとちがって、幸福の状態は、通常は持続したものなので、周囲は、長く、そのよい影響をうけることができる。

逆に、不幸な顔をしている場合は、一つの一時の苦悩ということではなく、その生の根本において、持続性をもって、不足があり恵まれていないと自己を捉えているのであるから、その否定的な影響は、やはり持続的で大きいものになる。一つの苦痛・不満にあるひとの場合、そのことの生じているときをさければ、周囲のものは、とぼっちりを食うことはないであろう。だが、不幸と思っているひとは、持続的に根本的に自己を恵まれていないと考えていて、持続的な不満・不平状態にあるのであり、周囲のひとは、持続的に不満をぶつけられる可能性があって、かれを持続的に避けたいことであろう。単純に立腹しているひとからなら、半日もすれば、とぼっちりなどうけることはなくなる。だが、「御不幸」に見舞われたひとに対しては、身近にいるものは、お悔やみをいったりして半年や一年は、謹慎しつつしみの態度で接することが必要になる。かれの前では、当分ははしゃぐわけにはいかない。不幸にとらえられて元気をなくしているものは、まわりからも元気を奪っていくことになるのである。

#### 4. 不幸顔をしがちなのは、なぜか

不幸顔とまではいわないが、不満顔は、しばしば見かける。満足しているとは、現状でよい、これ以上のものは、望まないということで、その人がそこを頂点にした、程度の低い存在とみなされる可能性がある。それに対して、不満顔であれば、なお、自分は、高いものを求めており、高いレベルの存在としてあるのだとみなされる可能性がある。そういうことが、ひとを幸福顔にさせない一つの要因となっているのであろう。

かつては、男子たるもの、むやみに歯を見せて笑うべきではないなどと、喜びも安易に表現することをいましめられた。男子は、平常から厳しさをもちて戦闘的な姿勢をもちて生きていくことが求められた。つまらないことに喜んでいたので、男が下がるということだったのである。なにかに喜ぶとは、そのことを自身にとっては希有の新規の獲得と見なしているということであ

るから、くだらないことに喜ぶと、そのつまらないことに自身がこのうえないものを感じていると表明していることになる。そんな感情など、高貴で戦闘的な存在は出してはならなかったのである。うちでは、それでも穏やかでこやかにしていてもよいが、敵対と競争からなるその社会では、笑顔などの油断した姿はふさわしくないということだったのである。幸福顔も同様であった。幸福感は、恵まれていることの表明であり、ささいなことに幸福顔をしていたのでは、下らないことに恵みを感じるような低い存在ということになるし、幸福などという、恵み与えられる受動的なことに浮身をやつす情けない軟弱なやつと見下されることにもなりかねなかった。ということで、厳しい競争や敵対的な社会のもとにあっては、男子たるもの、見せかけだけでも、しっかりした戦闘的なよそおいをする必要があるから、幸福顔や笑顔は、そうそうむやみにはしてはならなかったのである。

さらに、見るからに情けないひ弱な男性であっても、わが国の著名な小説家の二三がそうであるように、不幸顔をしているものは、「かっこいい」と思うむきがなくもない。満足した豚ではなく、賢い敏感な自分は、現状には、満足できないのだ、現状を思うと、不安におののかざるをえないのだということである。「単細胞」の者が満足しているのに比して、高貴さを見せるものとなるのであろう。青年は、苦悩する者として、不幸顔をしがちである。心身の変化そのものにおいて、また、社会的にも、不安定であり、満たされないことも多い。あるいは、社会問題にめざめ、改革をと思えばあい、満足顔はしにくい。世の不幸を自分が一身に背負ってというキリストのすがたは、世を憂いてこれに苦悩している者のすがたは、尊い。

だが、かりにそうだとしても、苦悩したり、苦勞するとしても、自身を不幸と覚えることになるとはかぎらない。自身は、めぐまれているが、まわりのひとびとは悲惨でということに悩むようなばあい、苦悩するとしても、不幸ではなからう。自らの属する社会の不幸をひきうけての苦勞は、おそらくは、充実をもたらすものであって、不幸などではないであろう。

自らに不幸をもとめるひとは、あまりいない。しかし、苦勞は、しばしばこれを自らにもとめることがある。充実した苦勞は、とくにそうであろう。内面的には充実し満たされているとき、外面が不平不満で不幸顔であったとしたら、わざと作られた渋面は、ひとをあざむき、不愉快にさせるものでしかないであろう。不幸をよそおう浅薄な渋面であっても、それを見る人々には深刻に映るものであり、まわりのものを心配させたり、なにが不足なんだろう、自分らに足りないことがあるのだろうか等と気をつかわせ、不幸をまきちらすことになりかねない。

さして不幸でもないのに、不幸顔をしがちなのは、そういう「格好」の問題とは別に、現代の日本人の場合、不遜な生活態度がこれをもたらしていることも少なくないように思われる。現在のわが国の国民の多くは、おそらくめぐまれた状況にある。だが、それを恵み・幸いと捉えることは、少ない。むしろ、これを当然ととらえている。「そんなこと、やってもらって当たり前」という不遜な態度が少なくないのである。「当たり前」「当然」と理解しているということは、その富み等をありがたい「めぐみ」とは解釈せず、したがって、これを「幸い」「幸福」とは感じないということである。満たされるためには、「もっと、もっと」ということになる。しかし、そういう富みの持続的な増大は続くはずがない。おなじ状態の持続は、これになれば、これが当然

となると、もはや、富みがあっても、恵まれていると思うことはなくなり、向上的に満たされたものを見出ししていたところは、不平不満となって、その持続には不幸すら感じていくことになる。現代のわが国には、そういう不遜な態度からする不幸顔も多いのではないかと思われる。それでも時代が向上・発展の途上にあるときには、より多く・より高くというところに幸福を見出し、それなりに満たされて幸福でありえた。しかし、いまや時代は変わりつつある。大量生産・大量消費は地球を破局においやるまでになってきた。浪費をやめて、せいぜい持続可能な発展にとどめるべきだということになりつつある。所与のめぐみを謙虚に見直して、ささやかな幸福を幸福としていかななくてはならないのは、時代の要請でもある。

#### 5. 幸福は表現されなくてはならない

正当な理由もなく不幸顔をしているひとは、まわりのものには、不快である。美しい人の憂い顔は、これを救済せねばと他人をさそうことがあるからであろうか、「西施のひそみ」のように他人には魅力になることがある。しかし、その憂鬱な顔とつきあわねばならない家族には、やはり不快なはずである。外では、憂い顔となっても、うちに帰ったら変身してにこにこ顔になろうとすることであろう。幸福な顔をしているものは、その幸福に反対の利害をもつのでなければ、周囲に快さをもたらす。とすると、ひとは、自身のためのみならず、周囲のためにも、幸福にならねばならないのである。幸福は、自らの求めるものだが、同時にそうしなくてはならないものであり、そうあるべきもの、当為となるのもである。それは、無欲・禁欲としてのストア的な幸福を幸福とすべきだということではない。感性的な欲望の充足としての幸福でよい、ただ、それをそれとしてしっかり味わい、かつこれを表現しなくてはならないというだけのことである。

不幸は、それが周囲に不快なものになるばあいは、これの表現をつつしまねばならない。逆に、幸福は、かりに、自身そんなに幸福とは思ってなくても、その表現によって周囲が愉快となり、明るく心地よいものになるのであれば、恥ずかしがらずに、これを表現すべきだということになる。われわれは、めぐまれていても、これを自覚せず幸福とも思わないことが多いが、それを表現することが周囲にプラスの作用をし、幸福を伝染させていくような場合は、恵まれていることをしっかりと自覚し幸福であることを表現していかななくてはならないのであろう。そんなことは、気恥ずかしいというのがわれわれのもとでは少なくない。だからこそ、その恥ずかしさをおさえて、めぐみをそれとして自覚して、幸福は、表現しなくてはならないのである。無理をしてでも幸福にならなくてはならないのである。つまりは、幸福は、当為となり、徳となるのである。表現され周囲に公開されていく幸福は、さらには、悪徳としての利己的な幸福を抑制することともなる。恥ずべき背徳的な幸福は、自身の幸福を公開するところでは、かげをひそめていかざるをえない。幸福を表現していくところがけの者においては、おおむね、すこやかな幸福が支配的となることであろう。

三木清(『人生論ノート』)は、幸福を「表現される」ものと特徴づけている。「幸福は表現的なものである。鳥の歌ふが如くおのづから外へ現はれて他の人を幸福にするものが真の幸福である」と(註6)。幸不幸は、自己の内面のことがらであり、個人的なものである。そのため、どう

かすると、それがそとに周囲に影響するものであることを見落しがちである。三木は、そこを注意してのことであろう、周囲へ表現されていくものと捉えたのである。「表現される」といわれてみると、幸福は、それをもたらしたひとに感謝の表現をするものであり、幸福をともにするものに確認しあっていくものである。やすらかな幸福は、やすらかな歌声となって周囲に広がっていく。ひとが表現している幸福を見聞きして、自分もそのようなさち・めぐみならもっている、自分も幸福ではないかと自覚・反省を誘われ、幸福の輪がひろがっていくことになるかもしれない。

幸福の笑顔は、この幸福を与え、支える者に、なによりの報いである。その笑顔の快さは、周囲に伝播伝染していく。であれば、厚意へのお返しという礼儀としても、周囲への配慮としても、かりに、さしあたりは、おっくうで、いやいやながらであったとしても、積極的に、無理矢理に自己を強いてでも、幸福は表現されるべきなのである。感情は、自然的に生じるものだが、ときには、つくられる必要がある。諸種のつどいで酒類が出てくるのは、心の緊張を解き、喜ばしい雰囲気をつくるためであり、日ごろは飲酒していないようなひとでも、少しは無理をしてもアルコールにつきあい、笑顔をつくっていくものであろう。ちいさなこどもの一生懸命つくった贈り物を受け取るとき、内心は「やれやれ、」と思っている、喜びの笑顔で応えるものであろう。嬉しくはないのに、喜ばねばならないときがある。それが礼儀であり、相手の厚意へのあるべきふるまいであることがある。同じように、幸福感は、自然的には生じてはこないけれども、恵みを与えてくれたひとに対して、そうよそおう必要のあるときがある。全体主義や独裁的な国家は、個人に幸福表現を強制することがある。客観的な不幸の充満した社会にあって、幸福顔を与える、(したがってまた、反対の不幸顔・不平不満顔の表現があたえる)社会的影響力の大きいことを、独裁者は、よく知っているのであろう。

幸福は、はっきりとそとに表現されていくのでなくてはならない。だまっていたのでは、それを当然のことと見なしていると捉えられて、不遜な人間と評価されてしまうことであろう。なかには、下手につまらないことに幸福感をもってこれを表現していたのでは自身の評価をさげしてしまうと思ったりすることもあるようであるが、逆であろう。些細なことにも気配りができているということであり、それは、繊細さ・やさしさを物語るものであろう。謙虚でしかもこまやかさをもっている秀でた人物であることを示すものとなるのではないか。ただし、行き過ぎは、何でもそうだが、ここでもまた、注意されなくてはならない。いくら客観的には不幸でも、主観的には幸福でありうるからである。家族などの周囲や自身の世俗的な幸福を極端に犠牲にしての宗教的な「至福」がそうであり、全体主義国家が、不幸にあえぐ国民に強制する幸福顔と、不平顔の抑圧がそうである。

## 6. 幸福能力

「幸福であるのなら、そう表現すべきだ」とすると、表現するためには、さしあたりは、そうよそおうだけでもよいが、本源的には、やはり自らの心中において真に幸福を感じていかななくてはならないであろう。幸福への無感覚・無反省の状態をやめて、恵まれているのであれば、その

ことを反省し、めぐみをそれとして感謝して幸福感をいただけるようにしていくことが求められよう。世に多くの幸福論の著作があるが、そのほとんどは、客観的には幸福・恵みが与えられているのに、主観的に幸福感をもてないでいる者に、こころの有り様をあらためて、幸せを実感するための方法を説くものである。

われわれには、なんらかのめぐみがあたえられている。しかし、それをめぐみとして、ありがたい幸運としてとらえることはあまりしないで、不遜な態度をとっていることが多い。必要なことは、謙虚になって、「こんなつまらない自分なのに、こんなにめぐみがあたえられていて」というような反省・総括を行ない、ささやかなことであろうとも、幸福なのだと自覚し表現していく習慣を身につけていくであろう。それが、また、まわりのものを快くつつみこみ、かれらをも幸福にしていくのである。こういう幸福は、意識して求められるべきであり、義務的な徳となるのである。

いくら富みをもち、めぐまれていても、幸福感をなかなかもてない者がある。富みの所有と幸福感は無関係に近いといってもいいぐらいで、N. ハルトマンは、ひとには「幸福能力 Gluecksfaehigkeit」があるものだという(註 7)。幸福を感じることのできる能力である。この能力には、めぐみを察知できる敏感さや楽天性などの資質がかかわる。恵みをそれとして繰り返して反省でき、謙虚さを失わないでおれる能力である。幸福者となり、それを周囲に表現するのは、そういう資質・能力をみがいていくということでもあろう。知性の反省においては、確かに幸福な状態にあると判断できるのに、それを幸福と実感できないことが多い。「幸せ」と実感できるには、もっと謙虚な反省が求められるのかもしれないが、幸福をしっかりと表現していくことも大切になるのではないか。表現は、身体的反応をもち、後者は感情には不可欠となるものであり、表現をこころがけることは、幸福感情をいだきやすくしていくことになるであろう。

幸福は、快適さの享受であり受動面をもつが、たんに心のおもむくままにまかせておくのではなく、能動的にみずから、幸福感をしっかりと抱けるようにと努力していく必要もある。幸福でありたいということにとどめるのではなく、幸福でなくてはならない、幸福にならなくてはならないと意志していくことである。ささいな恵みであっても、これを見のがさず有り難いことと捉えて幸いを感じ幸福表現をする者は、その恵みを与えてくれた者、ささえてくれた者に、そのやりがいを感じさせ充実感をいだかせることができるのみか、その表現を見る者を感じ入らせ、反省をさそうことであろう。そこに新たな幸福感を生じさせることもできる。幸福な顔は、幸福の輪を広げていくのである。重度の障害児をかかえた家族が(当初は、心中しようかと思うぐらいに不幸のどん底にいたことであろうに)、「むしろ、この子のおかげで、充実した人生をえられ、みんなに支えられておかげで」と、明るい笑顔を見せるとき、周囲のものは、こころがあたたまることができるのみか、人生観すらもより広く豊かなものにと方向づけてもらえることであろう。

現代日本人は、幸福を自覚するに鈍感である。豊かであるにしては、幸福感をいなくということが、諸外国に比してかなり低いようである。亀井勝一郎も、機嫌よく暮らすという「あたりまへ」のことの出来ない人が多く「誰もが・・・お互いに不機嫌に暮してゐる」(註 8)と現代人に対す



る不満をもらしている。生活に対する充実度・満足度というようなものが、つまりは幸福感をい  
だしている人が先進国のなかでは低すぎるのが、今日にいたるまで繰り返して口にされてい  
る。われわれには、「幸福能力」が欠けているのであろうか。

権利主張・自己主張をするような場面や対立的な場面では、怒ればいいし、不満をぶつければ  
いい。しかし、お互いに幸福であることを願い合う、自分たちを支えてくれている人々の前では、  
謙虚に、その恵み・幸いをふりかえり、反省をくりかえして、恵みに感謝していくことが求めら  
れるのではないか。幸福なのであれば、幸福だと表現して、幸福を伝播させていくような心構え  
をもつことが大切なのではないか。幸福は、義務的なものであり、身につけるべき徳なのである。  
われわれは、幸福にならなくてはならないのである。

註

- 1) Bertrand Russell; The Conquest of Happiness. 1930. Chapter 1.
- 2) 『亀井勝一郎全集』 講談社 昭和47年 第12巻 398頁
- 3) 『亀井勝一郎全集』 第10巻 132頁
- 4) アリストテレス『ニコマコス倫理学』 ベルリンアカデミー版(Bekker版)1100b
- 5) 『亀井勝一郎全集』 第11巻 316頁
- 6) 『三木清全集』 岩波書店 1966年 第一巻 212頁
- 7) Nicolai Hartmann; Ethik. 1949. Kapitel 10
- 8) 『亀井勝一郎全集』 第12巻 353頁

平成11年11月 『ぶらくしす』(広島大学文学部倫理学教室・西日本応用倫理学研究会)1999  
年秋号 1~13頁